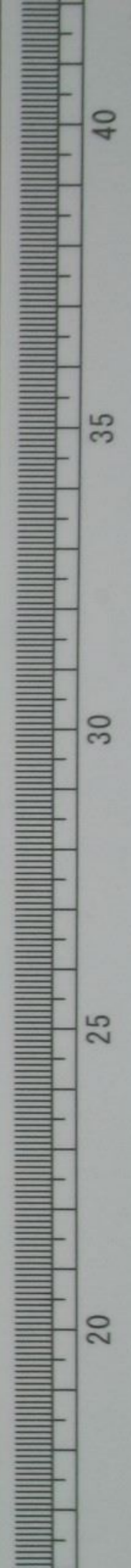


鶉記

後篇



5
1929
2



門へ 5
新
巻

うらら衣

波編

歌老辞

芭蕉翁の五十一歳と云ふ世と云ふ人の世

神波の西齋も五十二歳一期と終りの世に

末二年の辞世と残りの世と云ふ虚弱多病ある世

年と云ふ世と云ふ今年ハ五十一と云ふ秋も

中納言のあき人の世と云ふ世はいつと云ふ

よせと云ふ世と云ふ世に云ふ世と云ふ世

あけりたりと云ふ世と云ふ世に云ふ世と云ふ

あきと云ふ世と云ふ世に云ふ世と云ふ世

あきと云ふ世と云ふ世に云ふ世と云ふ世

あきと云ふ世と云ふ世に云ふ世と云ふ世



皆申さるやまじい事の時をわづらひておぼしめされぬ
何より何申へとも相向異同とむつりて枕お撲
も奉返もさる事なく遠ざかれも奥の事よ只一人
火燧浦老の事めさるる事なりとおもひの事なり
とさるめよ昔の人よもふいとれいしるもの
しつあきさるるあつたつたの整ひさるる事ありし國
乃軍にむついむ十の老よあつりてくさすの海
年暮ぬちりりもいつさる老と歎く事ある事
淨りりおとつて物も昔に今のよまふりていしる事
老人こゝろにさるる事ありし公の事あり拙い
は面白れとも今の面白れは面白れも昔に我
面白りりありちれい人よもさる事あり我を公乃

よ一いふまの事ありし事ありし事ありし事ありし
もの老とさるる事ありし事ありし事ありし事ありし
もの老とさるる事ありし事ありし事ありし事ありし
あき色の上にあやまらるる事ありし事ありし事ありし
とさるる事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
しつあきさるる事ありし事ありし事ありし事ありし
一法よ十法ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
さるる事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
不近何よりさるる事ありし事ありし事ありし事ありし
とさるる事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
人よまふりし事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

との端癖の奇朽と七世お孫にあひ一時人き
年月の別あり吐きてまゝのいともありりんば
大きある損とらよ一我れより不様根ありて楽
と志とせらるふりき恨ありさして自注のつてあうめり
こころにあらぬほ一きとありまも上京の人ハ詩歌
又著ものこころを深め去稿といや一々文種丹
万世の後も名とむ一ふりりる人ハ日用の
るこころも用申せむ或ハ文庫のそまに何し何
以残何百何十文と定家やふのそ法もいと口打
又ハい善利分をりより著編に著しやると文
徴明と法とのこころもけあきこころもけ分の外
あるるある世らるあるいりり、せむ悪くもま
あつちうにこころよによめ安き一と要あるへたれこころ
能筆、あつちうとて一字、二字お用もまるといふこ
こころのよ似てて下よそ一とらうも又画より位乃
是とあるは一能画のこころもいりてお絵
乃男ハ瘦くさる一と大は繪のそるハ肥く長身
うき世待ハ又平に始り、菱川よ字り今西川よ字
こころよ一と猿轡をのそ風えけ一、牡丹、あれ
ぬ花吹ぐ人より大きある雜のそむひよとあり
こころよ目さむるもあれ又ハ教寺れからぬよき
遠水よ波もく遠人の目鼻あはるに帆うけあは
そとて、走ることれらる繪よあはるいりさる一
俳諧師の繪、上よ下よの所法あ一とてお心

あつちうにこころよによめ安き一と要あるへたれこころ
能筆、あつちうとて一字、二字お用もまるといふこ
こころのよ似てて下よそ一とらうも又画より位乃
是とあるは一能画のこころもいりてお絵
乃男ハ瘦くさる一と大は繪のそるハ肥く長身
うき世待ハ又平に始り、菱川よ字り今西川よ字
こころよ一と猿轡をのそ風えけ一、牡丹、あれ
ぬ花吹ぐ人より大きある雜のそむひよとあり
こころよ目さむるもあれ又ハ教寺れからぬよき
遠水よ波もく遠人の目鼻あはるに帆うけあは
そとて、走ることれらる繪よあはるいりさる一
俳諧師の繪、上よ下よの所法あ一とてお心

流のこゝろの我も我流のなめりて
緒の憂替とくけい綴蓋のなめりて
まじりちよあられ耻志のなめりて
せらるるハよと吉田の法原とを理あるの
りては年比祝の満ち遊するのなめりて

原居辨

箕山の月ハ
して窺
垣ハ紫陌ハ隣
大原の亭
菴ハ其稻の
後敷よりハ
人の世に

てさ
仇もあま
しうとも
んじまも
鬼のあれ
申しく
てま
門ハ
と出
あひの
あが佛

へーまもあつて今つせあまき人、初は^用星宿の志つ
つーまも飽けと次第にほろーくー候とれ
いーま申りありこれに及ま友あれと申れ
る子ありに世中の法水にこそよせてさうく若
とさうへー始に似ぬ人もあるー花心の上皇も
うらうき名よ、まをまひりさうさうの神
まらうれ俗の謔ありか、さしやいともいあり
ととされと世の始をいゆまはよくさしやい
るにーさうかや、我方のよさしりーさし陰と
ありあはれにまーさくーれとあさうとま
薬もあ、ぬと人はあつとーおとまは雨
のあつとほーしてすまをいよまも鬼もあつれ

せよ人よ我もあつて只は病よあつた今、はらう
さうさうまもあつてさうまのまもあつて
られん、南郭の筆と吹りん此方ののさう
さうは老と病と一箇のさうまの園の
出さありまれと誰とおれ何を馳くさの
逃さうまもあつてさうまの又半題の門松と
桃は昔痛は神ありとさうまの娘入ー又法
まらうあつてさうまのさうまのさうま
これといさうまのまの世れ店とまのまの
さうまの世者さうまのさうまのまの
さうまのまのまのまのまのまのまの
通称とありては、挑灯の丸さうまのまの

叶の... 比の... 家れ...
市... 又... 門... 食...
田角...
食... 田角...
食... 田角...

利教及辨

天地の... 後... の... 釋... 一... 揚... 法...
天地の... 後... の... 釋... 一... 揚... 法...
天地の... 後... の... 釋... 一... 揚... 法...

まゝ博識の門子と云ふ意味は其の二重なる事あり
まゝと云ふはそれとまゝ耳遠りたる事ありつゝ同
ずむ人のまゝに多岐な意の如し〜あつた
冷あきか地すぢと云ふ事あるの事あり
一人〜講釈せんといつ〜一〜菩提
の名も跡々述と西念淨蓮とていふ〜
と世の人の〜をみるに今を〜と云ふ事あり
万土も不き〜の如し〜下女と云ふ事あり
つげ〜も流き〜人よ〜
まゝは〜調帝流女と云ふ事あり
まゝ〜人のか〜消息の事あり
〜水と云ふ事あり
〜何の事あり〜
〜摺小と云ふ事あり〜
〜事あり〜

鍾馗画襷

まゝ〜の家と云ふ事あり
まゝ〜の幟と云ふ事あり
疫神除の板と云ふ事あり
其劔と摺小と云ふ事あり

雪譜序

言はぬはあまのうらみあはし

脉説

世を捨てる法呼の抱く人さうに友よあつてさう
まけあすいお地居るのまよせはまきなき一鉢乃
まけも嘆氣にさくらねあつたの 藜もまゝに
抱くまゝ友のさうにさうまゝありさうのあは
又らうまゝのさうにさうまゝのさうのさうのさう
よりさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
縁をせまゝにさうにさうにさうにさうにさうにさう
凍餒の患はりにさうにさうにさうにさうにさうにさう
ゆりさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう

ある世をさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
さうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
抱くまゝにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
江中まゝにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
まゝにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
その海流あつてさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
噴く用と兼ね口の、飲合のさうにさうにさうにさうにさう
乃用とさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
のさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
よのせらふさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
天のまじりさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう
のまじりさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさう

上野つとく聖人... 御とく... 天地... 紙... 交... 面白... 五... 猫... 徳... 争... 争

争不奇文 勝六社

懐旧を神をめぐりて一耳も及ち一鼻も及たむ
これハく風物も大切あれとて我もさゆよと
いふれと縁ハくむらさきゆきとてとれと
縁の下よりんハ何とてゆきゆきとてかれと
心とまゝん天にこの日あり後ハこの縁あり
あつれと上下の泉字ハやちとてゆきゆきとて
まゝ

友とてし縁あり秋のま

宇嶽楼記

樓坐より成りて宇嶽とよみゆハつとよきま
富さよりむとてあつてハつとよきま
ひらけりれとかのを嶽のつらありとて子里とて
田あり村あり村ありと井社佛岡のつらあり
あつて西に似て西とて及てとて竜興寺とて
して花まつ雨とて備へて猿のまゆとて
月とてとて下戸とて餅とてとてとてとて
政とてとてはとて酒のゆきとてとてとて
涎とてとてとてとてとてとてとてとて
あり遊子あり一時の英才ありとて新詩百篇
うらやあり雅談一日ありとてとてとて
花もとてとてとてとてとてとてとてとて
らくとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとて詩歌のむらとてとてとてとて

うつゝ交 後編下

編笠賛

迹を深山の空よりは—おと蓬生れ陰に隠し
ても浮世より通工をあれと教ふる人も蓬りてや
あつむ蓬葉の浮ぬる鬼の持する宝はあつむ昔
暗明の深形の秘術を傳へて世に編笠といふもの
ありそを戴いし出る時ハ車馬終るころ市中をある
とく人我をあらとせしめて葉の夕らぬ日な塔乃
眺りしあるやとてあま人もあつむる蓬の葉垂れ
のせしより誰うといよみきても人の果るのみあつ
むる半残通用の宝よりして今春の世中よめあつ

きししの境より其徳をうけに優りてしむるれも
女ハハノ出立はハ似合とてしむるれも
けおあふんをうけに似しとてしむるれも
きししの境よりしむるれも
あふんの境よりしむるれも
の境よりしむるれも
町の境よりしむるれも
家あれとも今程の境よりしむるれも
え解してしむるれも
えりお母しむるれも
しむるれも
とてしむるれも
されし異國の境よりしむるれも
境よりしむるれも
とも女しむるれも
此の境よりしむるれも
境よりしむるれも

編むるの俄隠者や年カチ

歯牙説

畧一口のしむるれも
しむるれも
紙よりしむるれも
あふんの境よりしむるれも

ら〜きく雄⁺雌⁺霊ありあり〜く〜とすい〜る〜き
唯⁺雌⁺霊とさる〜く〜多〜く〜新⁺掃⁺の信⁺をさ〜りて希⁺絶
〜の信⁺を新⁺〜或ハ剛⁺ある待⁺と〜んけ〜く〜ん〜とら
〜〜〜く〜る〜のれも〜き〜き〜ら〜れ〜と〜女⁺〜
と〜〜〜〜〜〜の〜雌⁺霊の〜ん〜ん〜〜〜
〜〜〜雌⁺霊の自由あるは偉⁺果⁺と〜ぬ〜亡⁺者⁺さ〜ハ
我⁺も〜〜〜〜〜〜あり〜訪⁺い〜平⁺〜のあり〜ら〜ハ勿⁺講
〜〜〜〜〜〜〜中⁺迄の〜ら〜ぬ〜子⁺傳⁺の〜仁⁺の〜ぬ
〜〜〜〜〜〜〜〜の〜信⁺た〜子⁺索⁺契⁺園⁺子⁺の〜歎⁺と
と〜〜〜〜〜〜〜招⁺法⁺を〜れ〜と〜表⁺〜り〜り〜
〜〜〜〜〜〜〜〜の〜遠⁺〜ある〜き〜
〜付⁺〜え〜なり〜ぬ〜火⁺の〜張⁺〜と〜〜〜
と〜ら〜も〜痛⁺申⁺〜この伊⁺達⁺深⁺の中⁺〜〜〜の〜と〜恥⁺る
〜や〜〜〜〜〜園⁺を〜き〜世⁺の〜雌⁺霊の〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
〜〜〜〜〜〜〜の〜穴⁺も〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜者⁺も〜
〜ぬ〜ぬ〜雌⁺霊と〜ぬ〜ぬ〜〜〜世⁺俗⁺の〜ぬ〜ぬ〜ぬ
あり〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜世⁺俗⁺の〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
故⁺実⁺者⁺の〜ぬ〜ぬ

筆も〜して雌⁺霊消⁺る〜と〜ぬぬ

と必傳あり我も其後きよめぬさうありぬと
思へ人よ淨判のきよくて朝又數十年とせす
して餅は向ひよつせんよりと毎々して十萬倍
乃遠きとせすくちしてこの餅とまけては
併傳はあつてもあるはこれありの古れ
と只昔を煮るの條一辨と割と新にうまの
とてうも我生海ありらせ選よふは
偏に煮つゝの條海ありらせ選よふは
濃餅系の因とあるはこれありの古れ
同しこの餅の月とせすくちして南家子
とせすくちして昔は十月のころに
らせし、今もあつて出世のころに
よハハへきありあり同し時由の十
しき、祥名ありぬとせすくちして
のさいよへきとせすくちして一年の
くくくく一巻乃巻をきくありとあり
よ此道のきいありとありとありとあり
へくくく報謝の志もよく後の世に
のうまきありとありとありとあり
うまきありとありとありとあり
よねをきくありとありとあり

金石記

金石ありとありとありとありとあり

久しくあはれる子礼る可む月のはるあまらぬ
まらぬいれ老一といは友のちとと遁れらる
強けそ風箱に守せそ風の友よ交ぬるも新世
のそ非を端せりりみも人の世終さしりす
わらうも知るる如く知るるよ下回と耻と
まらうも源有れ終るりとあるとある人よ称嘆
ちらうと今や世の惜りたる事常よるら
りして同一老のあは根一うにらうらるら
といの

魂らうり秋身心居れしきられ

六十齡説

上壽ハ百歳中壽ハ九十下壽ハ六十と云ハ蒲柳
も老ののみのりて六十の齡はあはるの壽の程は
つらありらるらに世月の如る家けれはる日あり
くら世の人のかまはるてまらるははるはる姉あり
妻あり男女の子らありあはらるら公みらるら
ともまらるらとともまらるらとともまらるら
年老とらるらとともまらるらとともまらるら
とともまらるらとともまらるらとともまらるら
よらるらとともまらるらとともまらるら
くともまらるらとともまらるらとともまらるら
我のあはるらとともまらるらとともまらるら
六十とらるらとともまらるらとともまらるら

おとぎ話

まつとらつるお利のりあるあまのこは蒲団の
 字集いとむつとらつるあまおとぎ話のりあま
 五人のききもの解し及むす媚を求めぬ自然の
 名のりて俳諧の心風とてむすむを經とらつとら
 りる此物とらむは在るは好むとす指の甲とて所
 遊のり子如く多くは解をく申すはつとらむを
 しきこはあま昔孫晨はそをとりし法は流して
 より葦葉一つはひまをを送りて家國の所とてむす
 小あがせぬはるあまのりしむとてむすむは乃
 かめつてを眼のり外のあまのりむむむむむむ
 乃とらむはむむむむむむむむむむむむむむむ
 此物の風とのりなるはむむむむむむむむむむ
 必遠くつらむはむむむむむむむむむむむむむ
 又もむむむむむむむむむむむむむむむむむ
 小あがせぬはる中より解をぬむむむむむむ
 とも世に不用の利とらむはありて人むむむむ
 さつとらむはむむむむむむむむむむむむむ
 二本とらむはむむむむむむむむむむむむむ
 塚とらむはむむむむむむむむむむむむむ
 今とらむはむむむむむむむむむむむむむ
 りあつとらむはむむむむむむむむむむむむむ
 神とらむはむむむむむむむむむむむむむ
 ともむむむむむむむむむむむむむむむむむ

は似たりかしらむとていふたふも後わの友よむる場也
疲るるにも自也のつらうきいふもの似しひの直ヲキ
とさうしてさうなづくの後とあるはさきも梅のつれ
てけしあつこしとぬと人の常よ訓とさきよら
つらうしとぬとぬとひもけおさるしつらうて
痛きよりあつこしは不用の用とさるしつらう

まのこのさうしつらうあつこしおさるの神

與會整子文

酒うく人とてはる人又人とて後片とて味座のつらう
ありし酒の酔もやとて月花の真やもさうに友あるま

おの友もさうしつらうと志望の娘とつらうのしつら
あつこしは獨り只沖のなれとつらうとあつこしは庭あれ
と昔の人よさうしつらうとある時た整子のつらうと
おのさあつこしと幸この秋まわつらうとさうな
いれりつらうとつらうのつらうのしつら獨り酔つらうと
酔つらうも面白きおとと世は年の多きあつこしと
さうしてさうしつらうと人の疎も蚊たつらうと
おのこの毒を破つる蓋と碎きて雪つらうとさうしつら
ありつらうと目さしつらうとつらうの痛飲せし
おと下戸はさうしつらうと上戸はつらうとさうしつら
ハ命もつらうとつらうとつらうとつらうとつらうと
まのこのさうしつらうとつらうとつらうとつらうと

ちまんとされし粗の香ききよりいせを經て清き
 二月の花より七紅は花穂の濃きより甘れよりわら
 味は蜜砂糖は捨れりささしはせれあふの下戸は
 花語てわりの香きよ病のあしは女の涙より
 魚よりいさしはま名の整きし金とやよりた子
 輝を掃くきに委女を甘あしと毎の芳の隣
 よハ匠をさしとへしとと舎敷きのこまのあふく
 路よりししし

贈石及法師文

して一のあまししは子家持と蝶垣はうら
 ちまね血あふも初をを復ありく苦しはま
 中こあましし猶ほしし不及法師の求えたるまの
 栖ハカとより樹下石上のあましとされたり借を
 いしとのありよりあましとあましと軒は只家の
 のあつしと家よいさかたるあましとあましと夕暮の
 申よしとあましと表のあましと捨りまあしとつる
 津梁の丈志あましとましし只井龍の空はつら
 のあましとあましと辛ま地中のあましとあましとあましと
 我ちしあ

ふしうの安さふきし一増牛

深老井賦

瓜多ふからけくしうし二月のつお物と献しといは

してきよとて交の社事きくはいさよこしきもえに
 といふてつらひるはきよりまき花の宿にむねはまる
 家の田舎あきくわくは清波とまきるをせ成次京
 上松福とめ山中の一都舎別巴々笑七まきよりり
 三越萩系風とくく楢井の里勢川の宿まきし
 十餘れ驛亭みま家若つきくま大名の後ぬま
 本陣の幕とむ翻一は馬の鈴れきおさきとさ
 今ハ推のまにまきる石目やもあきくぬく此山中
 こそまきくも呼子まきの生女のまきとまきまきハ
 聊のは控さうまきして遠藤の風を恐まきまきま
 印昔よりのは合あきくまきまきまきまきハ山
 函谷れ難ふれまきまきまきハ偏に蜀道の險まき
 断腸とての積を懐と和言まきまきまきハ世
 道まきまき麻まきまきのまきの後くまきまきま
 しもまきまき山中まきまきまきまきハ山比まき
 みまきまきまきまきまきまきまきまきハ山比
 まきまきまきまきまきまきまきまきまきハ山比
 樽山あり福とめとの奥の徳恩寺まきまき各
 りの影像とまきまき服の松矢留は行まきまきま
 故宅御料の森ハ光まきまきまきまきハ山比
 旧蹟楯の少少まきまきまきまきまきまきハ山比
 不遺る山中の藁原ハ行基の臨川寺の寝まきま
 尋ハ仙まきの釣まきまきまきまきまきまきハ山比
 くれまきまきまきの暮まきまきまきまきまきハ山比

峯小舟の跡はすれぬ。飛泉ありと戸羅法布引
 うも名をこ甲のさるに都に遠き程ありと男灘女灘
 の契はうらまも連理の松は今名ありとありと名あり
 烟の浅らふ山はこも境のへくまも清嶽駒の坐高は
 不政のまをこまをて高士も肩を垂よこしと海
 のまの跡は死蟻の人のまはさし巴女と常力ハ男
 猪りのまをこまをて良材昔ありと伐するもそま
 屋敷は運びくま家の用とまをてと出とて洞川の
 漲るまをこまをて高工の術は列く曲宗踏ま
 の自在と傷く他郷の及まありと井戸や伊勢
 のまは湯舟はよりまをて福高の山開あり
 て流るまをこまをて備へまをて節のまをて申ありと

山村氏のあつらふりありありまをて活潑明神
 明神は嶽まをて福高のまをて定勝寺に長福寺の境に
 青雲の山の麓まをて清のまをて相島の古迹根のまをて
 峯は火のまをてまをて浮石明神のまをて金
 り橋伊勢川橋清川橋板波の橋はまをて岐のまをて
 を分てる堺ありまをては佳境にまをて風物まをて
 と石のまをて茶とまをて十名峠の名にまをて積まをて俳諧
 骨張の古松まをてまをてまをて峠を越まをてまをて
 正月のまをてまをてまをて風俗ありとまをて盆のまをて
 はまをて踊の風流ありとまをてまをて市と賑まをて
 築のまをてまをて尾府よりまをて東部へまをて跋ありと
 椽けまをてのまをてまをてまをてにまをてまをてまをて

乃亦必とと求むをくする不千點芒草其尚まら
辨文佳名ありて名月おの姿と愛をて末川の女
凡味又世に超りりとしてい言深手をあましの意はく
まゐりふりすしと秋の紅葉ハ里に先く折信濃ハ
十郡ハ賦堂一國の半ともてさる人片只とてははる
属するものと思ふに拙きよまよつて

四州亭記

尾府の西に一亭ありて四が亭と名づく其地ハ
濃江勢のころと兼く一と名の内は入るなりそ
一と入るなりしなりつとありさるなりとのそと
いふなりは娘終つていなり南心も侶あり
そのつと此亭のありしなり西の心なりつて
その底の容淡隈のよりよく暇を懐くとてこれ
をいとふなりあり仁者の愛むとわいしハ理を
あしとつて論をて深くき舟の奥とて舟のく
の傍にありと求む者ハ偏ハ山の世に遠き寂實を
あしむる者あり勢を柱ハ麓を挑くその勢中
之を憐む心の風景とてをくる者なりして必し
霊連の殿ハ烟をたき焚きく山の寂實を同す
を物とていづれの堂をけつとてすま之國一の
名山としてふるふとて烟を添けて只眺むの上

しそくとして世に傳へしことありしものなるをいふは士
俗としてせしむるは必ず風雅の人にあらずや
山に入る人も山をくもたれしは山といふはけりしこと
と駢りし人もあらずやけりし亭のたゞしむるはハハの風来
とあらずやけりし山寂寂とあらずやけりし山にありし飽て
拙き侍のむらさきと起ると櫓の侍のむらさきとありし
自由の名画と巻舒とありし似たりしものなるをいふは
淡珠の甲冑も下視とありしことしけりしものなるをいふは
之字と起しと擡ぐに播くことしけりしものなるをいふは
りりしや其ありしことしけりしものなるをいふは
かりしや同じしものなるをいふはことしけりしものなるをいふは
あれしや其も其化はけりしものなるをいふはことしけりしものなるをいふは
愧ふは擡ぐりしと辭とありしことしけりしものなるをいふは
記して擡ぐりし

六林文集序

俳諧の世にけりしものや今も纏紳のあつたより
あつたの紫の人もあつたものなるをいふはことしけりしものなるをいふは
りけりしものなるをいふはことしけりしものなるをいふは
我達たは守りしことしけりしものなるをいふはことしけりしものなるをいふは
一とよとけりしものなるをいふはことしけりしものなるをいふは
あつたものなるをいふはことしけりしものなるをいふは
五に、新茶のむらさきとありしものなるをいふはことしけりしものなるをいふは
今もけりしものなるをいふはことしけりしものなるをいふは

あらきさく少鴉やちりくむむあまむむ蛙も俳諧
るるもあまらるる一きつるる世の俳人もうよみ七
おかりよ一と俳諧の文章ハ新ハ旧俗文選世よ
はらむはくは其体とあま者のもうあまうくいよ
かの其辭ありす人の文とくもそ風体であま
はらあのもよと評せらるるいふとらういふとらうあま
夢もそとらういふくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
ハ雅と失りてくくハ甚るる人の編ハお歳よ
ちうて花のりふなむいよりたれと田樂園子よ
ふむしよとて茶をうり飲くやういふいふ如し其位
ハ至るる人の及よるやういふらん東花坊支考
文ハそとらういふくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
情をほく合まてくくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
世の人の文ハ正しくいふ俗中
りくくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
肺ハおれおれとや甲子ハ似たれともいふ
雅のそまにあらむとくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
人よるよくそめておれおれとハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
肩りくくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
餘確くくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
俗の語も入るくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
と編ちぬきとくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
よくくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中
いらぬ海に難くくハ甚るるの文ハ正しくいふ俗中

文系、喜平、二、三、玉、さ、ら、の、錦、と、綴、き、り、家、老、子
目、と、驚、馬、し、て、之、の、金、を、遊、び、に、遊、び、地、に、い、ま、さ、る、へ、う、は
中、州、旅、り、其、右、に、出、む、さ、れ、も、音、を、あ、る、人、に、稀、う、魏、
洋、く、も、い、ら、る、子、猫、に、小、判、の、耳、あ、れ、も、と、し、白、く、
史、を、世、に、あ、ら、さ、す、只、独、の、樂、と、す、以、る、ら、う、く、
輯、録、く、く、平、よ、小、卒、を、求、ら、る、久、く、金、葉、の
契、あ、り、く、辭、下、身、一、さ、あ、く、あ、く、不、才、の、稿、何、と
探、り、く、く、さ、ら、い、出、る、く、む、さ、れ、も、又、さ、ら、く、あ、り、
世、に、呈、報、と、南、山、家、の、錦、子、綴、子、紗、後、綴、紗、の、店、
庫、に、満、く、い、れ、も、も、入、口、の、暖、簾、を、あ、ら、む、事、綿、と、し、
用、也、を、店、を、導、く、人、の、ま、つ、ら、な、子、目、と、あ、れ、も、
暖、簾、比、相、の、よ、う、い、ら、い、り、な、さ、れ、い、家、の、本、綿、の
才、を、り、く、始、に、一、さ、ら、い、暖、簾、を、掛、む、い、ま、く、店、也
の、價、を、あ、げ、ん、や、く、つ、あ、ら、い、から、く、序、を、く、始、り、
の、た、か、た、の、區、一、く、い、ま、い、な、ら、い、く、一、家、に、
鹽、号、説、為、紺、を、巴、良

あ、ら、い、く、世、に、ま、い、ら、る、昔、男、の、昔、を、ま、い、
芥、川、の、く、く、は、あ、ら、い、名、の、た、ま、と、切、ら、れ、詩、賦、を、あ、
一、さ、ら、い、く、人、に、海、を、掛、の、く、ま、い、く、朝、と、ま、
の、焼、餅、を、く、く、い、ら、い、く、ま、い、く、ま、い、く、ま、い、
同、時、あ、ら、い、く、方、を、始、る、脚、と、ま、い、く、道、に、あ、ら、い、
又、ま、い、く、ま、い、く、富、を、ま、い、く、ま、い、く、家、事、を、ま、い、
そ、く、の、世、に、ま、い、く、あ、ら、い、く、の、く、ま、い、く、
の、連、歌、に、あ、ら、い、く、く、く、く、家、信、と、招、き、信、一

度の奥はよ及ひるる我の句は唯よ當りて業
入る時喜に人の喜あひて一と僅十一二錢の胡椒
とある者ありおしも店に應對の人よまこととて
赤句と情がくを此に譲りてこそ喜を乞ふ胡椒と
高いきを一と字祗又と深く感一世とく
人の連歌をよけり人こそ喜を乞ふと和文よ
和文あまるともそ業子に俳諧に耽るもけいあり
忘るへくす事と破りやとほくく既陸子靴
の先銀ちよきる一とこれときりて俳諧
も持交打も同く一とある俳諧あるへ一感ハあ
り拵うゝ家守とある者こそよふ心俳諧ハ
かくもあがり業子よ好む一とさハ俳諧ハ
第一のまことなりて之種の言を尋ねてハ素大
七風雅を助けとつあは俳諧の妙處ありと
今や其居の事ととまらなくも此業と業は
監光舎とて好むも此業ありはわが我ら
屋より出く業ありも濃き趣をねと世に俳諧の
者もこのあはれと光の一やよとば一と
と

聯句 兼一

まをばし楳安くあつ一とまも思のまある男
あきくあら一とあつあつの兼の門とと談一と
産まよとあつあつあつあつあつあつあつあつ

そよよ女老僧の訪いきてははれ用詠をすいつて
よすむ人をも同じて通まひ方の定ますむとあはれむ
いふ根同し及ぶし聯句をんとすまうて換抄乃
おのむと唱まて妖僧云秋の月と吹りやう難秋の
二まきにあまをいほ屋の屋をさるらうてやまは
又の夕アとゆふをて送れとあま女はう素園の
あまをいほて只この夕の僅もあま

換抄

錐汲水無葛

可涼風在露

庭宣松氣色

山懸月邪魔

長吐夜方冷

大跳盆亦邊

酒醒慙嫁...

茶沸響婆...

擇日四火灸

憐春万量致

邊櫻留記念

歸雁惜余波

借宿疑弘法

換題試頼阿

耳言牽油笑

口説入牀和

素園

截^{キレ}指^サ女郎^{ニョウリョウ}誓^{チカ}
 沙^サ腰^{ヤウ}祖^ソ父^フ病^{ヤミ}
 移^{ウツリ}敷^シ残^{ノコ}暑^ヌ褥^{マツ}
 脱^ハ屣^シ有^ア明^{メイ}蓑^{カサ}
 濱^{ハマ}市^シ初^{ハツ}鮭^{サケ}貴^キ
 辻^{ツジ}能^ノ油^{アブ}虫^{ムシ}多^タ
 花^{ハナ}閑^{ヒラ}粧^{シヨウ}寺^テ院^{イン}
 折^マ動^カ彩^{イロ}溪^{カハ}河^{カハ}

後うつゝ衣室屋より明和のまきうてお掃居
 の道筋よりうてられさうつぎ

六井お

鏡裏梅 うつぎ

市分紙

こころいハ鬼のささくあさううてさあま縮のひははは
 涙を永大君。玉のちうううう鬼のささくあさ
 さ苦のあ、衣箱うううううううううううううう
 ううううううううううううううううううううう
 情むのれううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううううううう
 男のううううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううううううう
 ううううううううううううううううううううう

子入用の調友と搔きすゝらまり杖とくき
助け棚の氣を驅出—麓にさく—地の草を拂
倚して石公の指下の履をぬき仰いそ伯猫、松乃
お衣と盗むよ便あり花の折—指—
つ—のよのりもささるる—
杖とくき—
西條、袖をぬき—
うほ臭き汗中も動く干つ—
二つ—
よけ—
はまり—
と起—
く—
自在鍵—
世—

あま向塚序

ゆあ—
のほ—
あ—
酒—
も—
ま—
の志—

の音かきよハ島よりき我にも年方と名のりく二句
の文を唱へてさうらんくさうさうせは鬼におくと遊
ちり傷の井ハ呼に隠ひりり豆の音にさく入るり
孫あしそささくさく遊されと定まれば音かき音あうと
老翁の音かきうてあつ福の日くまはれくさる鬼ハ
目くま跡くされともあうく跡ハ酒と好みく酒豪
の老をくまはれと酒のさきさく鬼く一人のりあむ鬼
となしりくさよあきハ酒の音あうのと只をさくさ
孫いよりてまとも者ともくくよ産ふるくされくさく
孫よりいあうとまはれと名とあはれく世よりくこのまはれ
孫のよりうとくくく孫のまはれくくくくく

樂晋路辞

晋路ハ竹内其の男少ニ四だより孫の音
正月くあうまくとあれくくくくく
それとあうくも感くく孫の音く
門人くく

不佞少年のけうく俳諧を好く今老境もくく病ハ
やうとくをく幽居の友とすれと何あうくくもあれ
ともさうくく年くくまはれくく人ハ申くくもさく
敲推を同寄くもあれと師才に似くくと斬くくく文の
音あを告く固く辞くまはれくくくと茲年六十六ハ孫
娘く一人の門人を約くくく名もく晋路と接く
け身子年二ハ火燧子脊とくく乳と咽をくくく
くくくあうくあうくあうくあうくあうくあうく
の音よりくまはれく小法師ハ月ハ床女おのがある

うもさるる原は尋し〜とら〜一字の同とあはれ我ら
物らとさつ方さるる深切究上の門弁いづれの人、さるる
家千許を〜して約さるる不いゆへありあられとも家あひ
先より西のあり故人らにや和親に原あり〜と況や
俳諧より遊を〜や只法式より〜とされともさるる
定まりて法式のあつ〜とる〜と〜と〜と
穿鑿形〜天下の公なり〜して後人の子らさるる
と只秘する法は〜とあられを世に秘する只使と
らるるありや物より月陰のをばあり感はてま後集の
ありありまらるる當分のをばあり〜我智明〜とらるる
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
と止り〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
物ら形明〜とあり原は〜と〜と〜と〜と〜と
た〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
ありあり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
付持〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
とせぬと秘する口決のあり〜と〜と〜と〜と〜と
玉倫の常ハあり原あり狐狸の字に迷ハ〜と
俳諧は混さ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
後士あり〜

寄末足舟歌

末足舟〜末足齋のあり〜とら〜とら〜とら

つゆのあつてつるに威と借れとも家内より獲尾
の縄ととらぬれ一りよく主人の地々の娘は儘と
故に人違つる怪の町を瓜期とて海子橋をよりのと
こゝに一宮御土に宿るに並ひて夏の昔北よりつるい
つせ一ちかやちり一ぼぼにのみ踊らむとて多狸の
蝦蟇とありて余と法一妖怪はらよ一いふ所も亦
ずり一條幸の御町は怪しき毒と合を法解りよ
ソよけをよまねく踊りおし不祥として坊や
へりて一山道のりぬれつるの瓜畑りと故人の約
もつと法一とつ一おのりつこの糟よつけき
と讀むる奇いあつたりはよ一いふとやうに
秋の夜の娘よまねく踊りおし不祥として坊や
の村の瓜畑り秋に果れつるいふ所も亦
たる影もまねく踊りおし不祥として坊や
りかりとつ平家ののら道と似せむとやい
身と宿る一一味解りよ味いとするりて寺に
の仇をよとにむとせむかゝいふと果一は
今もあつちをよけとあまや一ぬれつる
あつちをよけ瓜の蔓にちかやちりつるい
何とて果のあつちや不用の事いふとつ
うとあつち味解りよあまや一ぬれつる
と成や果あつちやみねくとと扇を把とつる
之下あつちの姿きつち清くも亦さむれは
ま丹よりあつち清桶の信託として棚が子孫の

祭嘯花文

この秋ハ毛利嘯花子の其の回の馬子出陣の事
を以て其の事ありし事あり社の日明きお友なりし
まらふの事なりし事ありし事ありし事ありし
の人と指しおしし事ありし事ありし事ありし
ことありし事ありし事ありし事ありし事ありし
控健子未布ふ六十の臨くかの事ありし事ありし
只まのりし六十の臨くかの事ありし事ありし
病を患へし事ありし事ありし事ありし事ありし
其の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
やうしんし事ありし事ありし事ありし事ありし
其の事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

送能甘茶辞

此秋を去りし秋ハ文科の月とんりし事ありし
事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし
の信濃路より事ありし事ありし事ありし事ありし
上布袋を穿てし事ありし事ありし事ありし事ありし
何れとんりし事ありし事ありし事ありし事ありし
らぬとんりし事ありし事ありし事ありし事ありし
の一句を去りし事ありし事ありし事ありし事ありし

編み物ありし事ありし事ありし事ありし

懐的辞

風月堂を訪りてしるのけ家よ去張さす
 一軸をそとく感あるの餘り紙をよと請く一句とて
 今の紙をよそのそとくあそその世を

六林いづく風月堂ハ屋府本所書集あり此の巻ハ甚老を
 け紙の比えよとてしる一句と請るハ志蹟あり今此ハ横書を

書集風月まきし
 せんもやまきくきで
 ちりしとてやす
 書の降出まれ
 印
 書出む
 せんみ
 こまは
 丁卯播月抄
 夕通ちりし

縦九寸五分斗一尺一寸五分斗
 今横物の一軸と
 是貞享四年丁卯冬のりあり今
 天明八年戊申に至る百二年あり
 夕通ハ今の風月を孫ゆつる様
 えてある世集の記者あり

巻家文

人のそととして指しある一軸とありてしるよとてしる
 古縁とありてしるハいふハ縁をよとてしる
 今身一巻のよに縁も捨く久しきよとてしる
 我をよとてしるハいふ縁よりハ方とありてしる
 よとてしるハいふ縁よりハ方とありてしる
 口よりありてしるよとてしる

今園うるよとてしる
 廿秋の戸棚ハ餅や捜さむ
 りとめくしとてしるハせん

更遊亭記

いづくの山里に代りてしる
 山に代りてしる
 山に代りてしる

のきつ録一 張氏、後栖は似く多々富の因一に
我令語の氣不似家あり之のありて上清を以て
常にまじりけと物の不自由ある山中ありに今の時
風雅にありと客とあまらる中子実山方の山家と
承り時、襖子風塵に隔く名のおよみ松の茶と煮火
く一室子幽趣とまじり一はありし山麓に幼て
して浅木の丁一に年まじりに暮る一は真一を号を
平少は更幽の二はゆと以てす 承り老と病にありこれ
く林趣一も訪ありあり人ありは此名れ
虚ありとありとあり一

つのおのり一

むう一 業がほい人の娘とまを造りたるより
漢は能書の人一はく出我名のみ世大伴にあま
乃名とありの娘はこれにまよおはし業はらう
ある西のあまをうつもの大伴は又は千七のらうなと造り
く和名は自由の傷とありとありては我れ
との字千七と名と配しと人を造りしとあり
自をとてく人の目と造り一はありては母の
あんとまをく假名と姓一大伴のまをく一はありては
やま一はありては世のまをく一はありては人の
ま一はありてはまをく一はありてはまをく一はありては
目よ涙してはまをく一はありてはまをく一はありては
まをく一はありてはまをく一はありてはまをく一はありては

如く一我々の奇女は...
 定まり年を...
 渾身を呼出...
 かの...
 小指...
 まより...
 さり...
 義を...
 の...
 あり...
 い...
 り...
 濡...

与伝書文

豊後州内海更直事三止書

机...
 刊...
 多...
 は...
 煤...
 くる...
 く...

漢和子川集序

俳諧の漢和昔よりまじりあはれりるにいかんより俗語
ありき一向よ字とあはれぬ人の志もまじりあはれりるに
ある人も法式もまじりあはれぬ人も辨あはれりるに
あきあきあきあき一字よまじりあはれぬ人も辨あはれりるに
文を助くもやばらるにもあはれ中より古き一帖を
わたりとて程もまじりあはれぬ人も辨あはれりるに
箇のよきもあはれぬ人も辨あはれぬ人も辨あはれりるに
むしりとお公の俳士の後より我らより一ツ宛の拙
はあはれりるに撰者の求むるもあはれぬ人も辨あはれりるに
と整へり

香木記

むしり龍の絵を好むる人もあはれぬ人も辨あはれりるに
りるに好むる信あはれぬ人も辨あはれりるに
あはれ我らより花井某流く香乃を好むるに
聖山より之よりあはれぬ人も辨あはれりるに
年経るも底あはれぬ人も辨あはれりるに
乃あはれりるに好むるもあはれぬ人も辨あはれりるに
きあはれりるに香木記よみちりるに好むるもあはれぬ人も
の心算に焼くる白のあはれりるに好むるもあはれぬ人も
あはれりるに好むるもあはれぬ人も辨あはれりるに
たつとくもあはれりるに好むるもあはれぬ人も辨あはれりるに
名あはれりるに好むるもあはれぬ人も辨あはれりるに
柯亭竹の笛焦尾

の寝るを寝るたるなり―ふもよき瀬のちからあつては
夢を―てちて夢を正すもたきなりたはつて白くはつて
法のよめあつてよのきありゆるよの寝るを―あつては
久之の月の半も満と描くはけを―あつて白く
けはのよめあつては

白の巻や月の巻いきりあつて

百話亭辭

令人の口を緘―抱しとる者―のふもよき瀬のちからあつては
人の口を緘して―守る者―あつては―あつては―あつては―
せること―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
睡るものありぬのまに―あつては―あつては―あつては―あつては―
法を―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
いらんこと―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
捨てては―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
新世俳諧一時の鼓吹よかりとる者―あつては―あつては―あつては―
さあつては―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
とあつては―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
の後を―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
娼物の出―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
百物語の會―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
ありとて―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
女の首―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―
家―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―あつては―

名雨亭日記

城北の市中は初雪ありていよいよおのこもさうり世々夢と
響く業とて表ふ心も吾分の暖を産とうき世の風
はあひうせせらるる塵の終るとも申せしと内々、狐松軒
の窓と空満の月を照してそよ風よあそび詩を紙
又きよとつらとてそよ世の人と友とて何樂世の俗家
はまよつては史院秘伝の巻もして商院とてとらん
りりり若泊林ハ乃カ名も隠して茶を賣らんとい
えりて安くえもねぬ今いよいよ隠れぬといふ事
あよきんといふ隠る一。我、迷栖を敲きまよつて
まよつて致とあれりといひて我、隠れ遁の穴をまよひぬれ
とも世に建ちあつたあよひ隠れ遁人は擽されく風志の

岡とてはる日サ一々中々世後にまよつて人さき世に岡
とてはる海と鳥のう人をそよるにまよきれまよひぬれ
鳥よく隠れぬと海もあつたありまよのあつたまよひぬれ
と路もよく隠れぬと路も終はす黒白の隠れぬといふれ
ゆきりて世にまよひぬれとあまのまよひぬれとまよひぬれ
まよひぬれとまよひぬれとあまのまよひぬれとまよひぬれ
試、同じ又まよひぬれとまよひぬれとあまのまよひぬれ
されともいふまよひぬれとまよひぬれとあまのまよひぬれ
風穴居る雨の隠れぬといふまよひぬれとまよひぬれ
上國世臣の家よまよひぬれとまよひぬれとあまのまよひぬれ
父祖の徳を傳へ刻とらへまよひぬれとまよひぬれとあまのまよひぬれ
竿とて吹くも二十とてまよひぬれとまよひぬれとあまのまよひぬれ
竿とて吹くも二十とてまよひぬれとまよひぬれとあまのまよひぬれ

化くよりと屋と藤——如——福のまゝにまゐりて
まゝ松葉の存とを安んずくみつゝ妖の皮と程魯魂の
心辨と解——卒子蓬蓬のまゝに定まらばく世の外
は餘齡をまゐらばり知るの因縁くのこと——今に樓尾
すも建つ——とらそせつる子人も定まらばつてく候る
柵も雨白きでし今に叢木をまらけりけり後つみの
岡を妨らるるよりまらけりけりまらけりけりけり
のより狐松のあり——岡調を思はるるの人世にうら
穴の狐あはれとまらけりけりけりけりけりけり
とまらけりけり我も亦快くとまらけりけりけり

方十園記

ある——名はしるく方十園とす——十甲あり十はありけり
所はありけりまらけりけりけりけりけりけりけりけり
し候ふるとまらけりけりけりけりけりけりけりけり
無むつまらけりけりけりけりけりけりけりけりけり
は園とんせりけりけりけりけりけりけりけりけり
とへ——けりけり安永甲年同福月まらけりけりけり
はまらけりけり七十年の半持まらけりけりけり

指掌堂記

年けおまらけりけりけりけりけりけりけりけりけり
し候ふとまらけりけりけりけりけりけりけりけり
し候ふとまらけりけりけりけりけりけりけりけり

しつて秤十重誓のさるるをよ文人雅士よつたし
く我知の益をくすむるをくく譲りたまふこと
しのお家の人のいふにすむるにせむるに
まよるべきにすむるにせむるにせむるに
とてらやうにせむるにせむるにせむるに
南家のいふにせむるにせむるにせむるに
の栖を求むるにせむるにせむるにせむるに
へたせむるにせむるにせむるにせむるに
指掌と定むるにせむるにせむるにせむるに
くしつて秤十重誓のさるるをよ文人雅士よつたし
とてらやうにせむるにせむるにせむるに
まよるべきにせむるにせむるにせむるに
とてらやうにせむるにせむるにせむるに
南家のいふにせむるにせむるにせむるに
の栖を求むるにせむるにせむるにせむるに
へたせむるにせむるにせむるにせむるに
指掌と定むるにせむるにせむるにせむるに
くしつて秤十重誓のさるるをよ文人雅士よつたし

送月事記

西濃成りの甲にせむるにせむるにせむるに
のさるるにせむるにせむるにせむるに
譲りたまふこと
しのお家の人のいふにすむるに
まよるべきにせむるにせむるにせむるに
とてらやうにせむるにせむるにせむるに
南家のいふにせむるにせむるにせむるに
の栖を求むるにせむるにせむるにせむるに
へたせむるにせむるにせむるにせむるに
指掌と定むるにせむるにせむるにせむるに
くしつて秤十重誓のさるるをよ文人雅士よつたし

是る蘇漢と在姓を分り西ノ角ハヤ伊勢方ナリ
 近江の山々として巖をくく徑を甚遠くは又ちうがは
 呂よき梅子并風といふるこも一わらう城下これ
 と風堂の雪はきましく老子豊名書れ目を驚るあり
 江戸の佳観りいづくすましくいと揚てらけむと
 せんさねの城をく嶽古時をふいのころ有羽秋ハ福美
 高に宿一ぬらまをに海を録只丈月のことこそ
 遠るましくれ此又一字と流す物名入といふ物ハ
 こよりぬらまといふまをを兼ひ送りといふ遠下ハ兼つ
 へ一まをといふい二字を定む濃あきおを惜むん也
 所謂東坡の真字ハ裏合まをの隣ありむとあり
 ころ也とまよはれをして記しん

年旦の口号

年旦のくくくくくくくくくくく
 けつりて人の同くくくくくくく
 ぶつりてまをくくくくくくく
 よくくくくくくく
 けつりて死後といひ一四百七ナリ
 つきくくくくくくくくく

松歌 并引

金森氏桂五子の存一株の松ありけ松よよと我
 ま一語を求らるるけ松よよといふは松母のいんけ

あつて始々々 髪を束ねる年、すまひいふうへー 小松のそ人
と花子つゝうきく 美髪を束ねるうきく 栞ハ 露の葉
くよへく 影ハ 匂ハ 清くへく 今ハ ありきりしとを 家
あつた桂子のきぬし けいねまハ あつたは ひとしとらと
とやく 孝徳ありき せむねま 及びつらふし したわく 少女の
あつたとあつたよきうす せむねま といふ曲よりす けいねまの 唱歌
を四句のしと 船名の 駒とあつたり 自然ハ けいねまの あつた
りし 自然ありてしとあつたよき、せむねま ありて 歌ハ 曲のし
と 花子つゝうきく の 求りぬ 美髪ハ 束ねるの せむねま ありて
なり

うきく せむねま ありて
人ハ 美髪ハ 束ねる

あつて始々々 髪を束ねる年、すまひいふうへー 小松のそ人
と花子つゝうきく 美髪を束ねるうきく 栞ハ 露の葉
くよへく 影ハ 匂ハ 清くへく 今ハ ありきりしとを 家
あつた桂子のきぬし けいねまハ あつたは ひとしとらと
とやく 孝徳ありき せむねま 及びつらふし したわく 少女の
あつたとあつたよきうす せむねま といふ曲よりす けいねまの 唱歌
を四句のしと 船名の 駒とあつたり 自然ハ けいねまの あつた
りし 自然ありてしとあつたよき、せむねま ありて 歌ハ 曲のし
と 花子つゝうきく の 求りぬ 美髪ハ 束ねるの せむねま ありて
なり

小松のそ人

栞ハ



露の葉

補逸

布袋屋風字句集序

風物と常と西東するもの布袋屋を訪はるるは
 訪へい句れあはるるは句あれと記せしむるは
 記する者との全吟うと一袖の端りさるるは
 年の夏懐ふききあら一丙丁を延まて池魚の笑
 け無子よ及ぶ年未の長きい端りく一何れ鳥かき
 きん女惜心一恨心一あき一深く悔一程きよん
 よ記するはさし出くさるるは又一帖と起り
 さるも其かきさるるは十に一とれらるる及ら
 されともあき一の年らあき甚きに續りやまに隣
 きんしてさるるはあきはらりあき又持よきさるる

本と清はくさるるはよきさるるはまのまに
 懐けははよき生よ厳必茶一さるるは融かありさるる
 より句をさるるは一さるるは和のまを焼くものま
 何の悔えの塞をさるるのま一も今十斗のまを焼く
 後さるるはさるるは

花のやうきさるるのまを焼く

昭和二年庚寅に集る古稀あ一年のまをさるる
 後さるるはさるる

